

平成 30 年 10 月 12 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 2018201880279

氏名 川内 有子

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ロンドン (国名 イギリス)

2. 研究課題名 (和文) : 翻訳をとおした文化受容の研究—忠臣蔵を題材として

3. 派遣期間：平成 30 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 9 月 20 日 (172 日間)

4. 受入機関名・部局名：ロンドン大学 SOAS

5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先であるロンドン大学 SOAS では、派遣以前から継続して取り組んでいる研究課題である、赤穂浪人の討ち入り事件の英語訳に関する考察について、以下の 3 つの観点から取り組んだ。

- (1) ジョン・メイスフィールドの翻案戯曲 The Faithful の初演資料の翻刻、分析を行う。
- (2) 翻訳における「意識」部分について、同時代の英語訳の実態と比較し、共時的に把握する。
- (3) 海外のトランスレーション・スタディーズの理論を学び、その中での本研究の位置づけを明らかにする。

(1) バーミンガム図書館に所蔵されている The Faithful の書き込みの翻刻を行い、SOAS の大学図書館および大英図書館において、継続的に収集した、初演時の劇評や新聞に掲載されていた上演広告と照らし合わせ、メイスフィールドが付け加えた演出とそれに対する観客の解釈や反応について考察した。

(2) SOAS の大学図書館および大英図書館における資料調査を通して、翻訳の書評や広告に加え、それらの掲載誌の前後の号にも目を通すことができたことにより、19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリスにおける翻訳に対する見方の傾向や変化の方向性を見出すことができた。

(3) アンドリュー・ガーストル教授からの紹介により、日本古典文学の翻訳の実践者であるアラン・カミングス教授およびトランスレーション・スタディーズ研究所のセンター長であるロスベアグ・ナナ教授との面談の機会を頂いた。カミングス教授からは、大学院で開講されている日英翻訳実践の授業への参加の許可を頂き、翻訳の実例分析や、翻訳者のゲスト・スピーカーの講演によって翻訳の手順や規範について知ることができた。ロスベアグ教授との面談では、世界文学研究、比較文学研究、トランスレーション・スタディーズのヨーロッパにおける状況、申請者が取り組んでいる研究内容のトランスレーション・スタディーズにおける位置づけ、SOAS でトラ

(様式7：電子媒体)
(若手研究者海外挑戦プログラム)

ンスレーション・スタディーズの指導に用いられる著作について教えていただいた。この面談においてご教示いただいた著作を読解し、申請者の研究内容がトランスレーション・ヒストリーの枠組みを利用することができるものであることを理解した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本派遣によって得られた研究成果は、以下3つの場で発表することを考えている。

- (1) 10月21-22日に開催される日本英学史学会大会(採択済)、その後、紀要への投稿 2019年度
- (2) 2019年にイタリア・カフォスカリ大学で開催される、東アジアに焦点を当てたトランスレーション・スタディーズの学会(EATS3)への応募。

(3) 現在執筆中の博士論文への反映

- (1) 資料調査において、日本国内で在日外国人向けに発行されていた英字新聞を閲覧した。これらの資料を通して明らかになった、『仮名手本忠臣蔵』の英訳の日本国内における読者(在日外国人と英語を学ぶ日本人)の存在について日本英学史学会大会において発表し、論文投稿を行う。翻訳の目標文化だけでなく発祥文化も翻訳の成立に寄与したことを指摘する本研究の成果は、トランスレーション・スタディーズの枠組みにも応用可能である。
- (2) EATS3については、ロスベアグ教授との面談の際に情報をいただいた。学会では、申請者の研究に利用できる研究の枠組みであるトランスレーション・ヒストリーの世界的な権威であるアンソニー・ピムが基調講演者として登壇予定である。6.(1)で示したように、申請者は、翻訳の背景としての発祥文化の重要性を派遣期間中に認識した。EATS3では、発祥文化である日本のナショナリズムの高揚が日本人の英訳に与えた影響について、19世紀末から20世紀はじめにかけての約40年間の言説の推移を通時的に論じる予定である。
- (3) ロンドン大学 SOAS の大学図書館は、蔵書を基本的に開架で提供しているため、申請者の研究と関連すると思われる本を新たに見つけることができ、20世紀はじめに出版された日本に関する著作における言説を一連の流れとして認識することができた。これまで、申請者の博士論文では、本文中にとりあげる翻訳という点と点によって論述が進行していたが、本派遣による成果を取り入れ、よりダイナミズムのある内容へと修正したいと考えている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本派遣を通して申請者が得た最大の成果は、次の2つである。

(1) 英語圏における文学理論を軸にした研究方法を見聞した

(2) 現代の日本文学および映画における翻訳規範や翻訳の過程について知ることができた

- (1) 申請者はこれまでの海外における学会発表の経験の中で、日本で発表する場合と同様に作品や研究対象を掘り下げた結果をそのまま英語に訳しても、海外の研究者との議論の下地がうまく築けていないのではないかという問題意識を持っていた。そのため、日本に関連するシンポジウムや学会だけでなく、トラベル・ライティングや19世紀のイギリス文化といった、申請者の研究と関連のある研究発表へも積極的に出席し、研究発表の定型を学ぶよう努め、研究手法やその手法が主題に対して妥当である根拠の共有が多くの発表の冒頭で行われていたことを理解した。この気づきにより、派遣期間中に閲覧したイギリスの博士論文やトランスレーション・スタディーズの研究書などを、以前に比べ、より効率的に読むことができるようになったと考える。また、今後参加を予定している海外での学会発表にも応用していきたい。
- (2) カミングス教授、来年度に出版予定である新しい英訳『仮名手本忠臣蔵』の翻訳者ロナルド・カバイエ氏、日本映画の英語字幕制作者ら、翻訳を実際に行っている方々との面談や、北斎の著作の英訳を目的とした大英博物館日本部と立命館・大阪大学との共同プロジェクトである北斎プロジェクトへの参加を通して、日本語からの翻訳が実際にどのように行われているのかを知ることができた。どちらも日本文化の重要なメディアであるが、文学と映画とでは翻訳規範や手順、翻訳にかかる時間は全く異なっていた。文学においては、原典の意味と調子を訳文に再現することを目指し、日本語の注釈書の比較、数種の辞書を比較し、また先行する他の翻訳を確認しながら訳文を作成していく。これらの面談やプロジェクトの参加を通して、翻訳者が入手可能だった資料や相談できたであろう同時代の専門家といった環境が翻訳に及ぼす重要性について実感をもって理解した。